

「精神医学」受講における学生の 精神障害者イメージの変化

大西 良¹⁾・辻丸秀策^{1,2)}・鋤田みすず¹⁾・大岡由佳¹⁾
山口智也³⁾・岩永直美¹⁾・福山裕夫^{1,2)}

Changes of the Mental disorder image in “psychiatry” attendance

Ryo ONISI¹⁾, Shusaku TSUJIMARU^{1,2)}, Misuzu SUKITA¹⁾, Yuka OOKA¹⁾,
Tomoya YAMAGUCHI³⁾, Naomi IWANAGA¹⁾ and Hiroo FUKUYAMA^{1,2)}

【要約】本研究では、「精神医学」を履修した学生に対して、受講前後で精神障害者のイメージについて質問紙調査を行った。調査の結果、①調査項目すべてで、肯定的イメージへと変化し、有意差がみられた。②性別とイメージの関連を調べたところ、受講前では5項目、受講後で1項目で有意差がみられ、性別の違いによってもイメージが変化することを明らかにした。③因子分析の結果、受講前で「否定的性質イメージ」「疎遠イメージ」「内向的イメージ」の3因子、受講後で「受け入れイメージ」「相性イメージ」「反応性イメージ」「親密イメージ」「外向的イメージ」の5因子の抽出された。④因子分析によって得られた因子同士の関連性については、「否定的性質イメージ」「疎遠イメージ」と「相性イメージ」、「内向的イメージ」と「反応性イメージ」に関係がみられた。

以上のことから、「精神医学」受講によって、学生の精神障害者イメージは大きく肯定的なものへと変化すること、さらにイメージ内容が“親近感”を表すものから“相性”へとより具体化されて性格的なイメージが可能になったことを明らかにした。

【キーワード】精神医学、精神障害者イメージ、学生

調査目的

人間は身体的側面・心理的側面・社会的側面をもち、それらは別々ではなく、総合体として統合された全体的な存在である。援助者は対象を一側面だけではなく全体的に捉えて、的確に対応できる態度の形成が必要とされる¹⁾と言われるように、社会福祉教育の基本はそのような態度の形成にあるものと考えられる。いうまでもなく、障害を持つ人たちやその家族に対する理解は、その人たちの置かれてい

る文化社会的条件あるいは個人的経験によって様々であると考えられる。これに対して、組織的・体系的な社会福祉教育が、学生の“精神障害者観”の形成にどのような機能と役割を果たしているのかを明らかにしていくことは、これからの社会福祉教育を考えていく上で重要な手がかりを与えるものと思われる。そこで本研究では、「精神医学」受講した学生を対象に受講前後での精神障害者に対するイメージの変化について調査、検討を行った。

¹⁾久留米大学大学院比較文化研究科

²⁾久留米大学文学部社会福祉学科

³⁾久留米大学大学院心理学研究科

¹⁾The Graduate School of Comparative Studies of International Cultures and Societies, Kurume University

²⁾Department of Social Welfare, Kurume University School of Literature

³⁾The Graduate School of Psychology, Kurume University

調査対象

本大学で「精神医学」を履修した心理学科90名、社会福祉学科20名、経済学、法学科等10名のうち回答の得られた79名の学生を対象とした。本大学は、大学病院を併設する総合大学である。

講義内容は、統合失調症、気分障害についての基本的知識や支援方法などが中心であった。

調査時期

平成15年5月(受講前),平成16年1月(受講後)。

調査方法

質問紙法。Osgood, C.E. (1957)⁽²⁾ が考案した Semantic Differential 法 (以下 SD 法⁽³⁾) を用いた。SD 法はもともと言語の意味の測定法として開発され、形、音楽、絵画、商品、人物など広い範囲にわたる事象に対して抱く意味あるいはそのイメージを測定する方法として利用されている。本調査では、井上 (1959)⁽⁴⁾ が心理学や教育学の分野で体系化した項目をもとに23項目を設定した。これらの形容詞対を用いて精神障害者に対するイメージを評定し、「よく当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」の3段階の評定尺度を設けた。評定尺度の配点は「どちらでもない」の3点を中心に置き、1～5点の配点を行った。したがって、得点が高いほど形容詞対の右側のイメージが強調され、得点が低いほど形容詞対の左側のイメージが強調される。

調査結果と考察

調査対象の学生の性別は Table 1 の通りである。調査対象の学生は全78名 (男性19.2%, 80.8%) であった。

Table 1 性別

	人数	%
男性	15	19.2
女性	63	80.8

1) 受講前後でのイメージ得点変化

受講前後での各項目の平均値の変化を表したものが figure 1 の通りである。受講前の平均点が最も高かった項目は「気分の安定した-気分の不安定な」で、次いで「外向的な-内向的な」「優しそうな-神経質そうな」などであった。つまり、「気分が不安定」「内向的」「神経質」などの気質や性格を表す内容でネガティブなイメージであった。受講後では「気分の安定した-気分の不安定な」で最も平均点が高く、次いで「強い立場-弱い立場」「優しそうな-神経質そうな」などであった。受講後では精神障害者の置かれている立場に対するイメージでネガティブなものとなっている。

受講前後での平均値の変化をみると、変化の大きかった項目は、「安全な-危険な」「外向的な-内向的な」「明るい-暗い」(平均値1点以上の変化)であった。

次に、これらの項目ごとの変化について、対応のあるサンプルの検定 (t検定) を行った。その結果は Table 2 の通りであった。

すべての項目で有意差が見られ、すべての項目が前後で変化することが明らかになった。

2) 性別によるイメージの変化比較

次に、受講前後での性別と各項目の関連を明らかにするために分散分析を行った。その結果が Table 3 (受講前), Table 4 (受講後) の通りである。受講前において性別でイメージに差があった項目は、「話やすそうな-話しくそいな」「強い立場-弱い立場」($p < 0.01$), 「優しそうな-神経質そうな」「親切そうな-わがままそうな」「温かい-冷たい」($p < 0.05$) の5つの項目で有意差が見られた。このように、接しやすさや親しみを表す項目で性差が見られたことは、男女での違いとして精神障害者に対して漠然とした距離感を抱いていることが推測される。

受講後では、「相性が合う-相性が合わない」($p < 0.05$) という項目でのみ有意差が見られた。受講前は、親近感などの漠然としたイメージ内容であったのに対して、受講後では「相性」というより内面の性格の不一致に関するイメージ内容に変化しており、精神障害者に対する距離感が縮まったことが

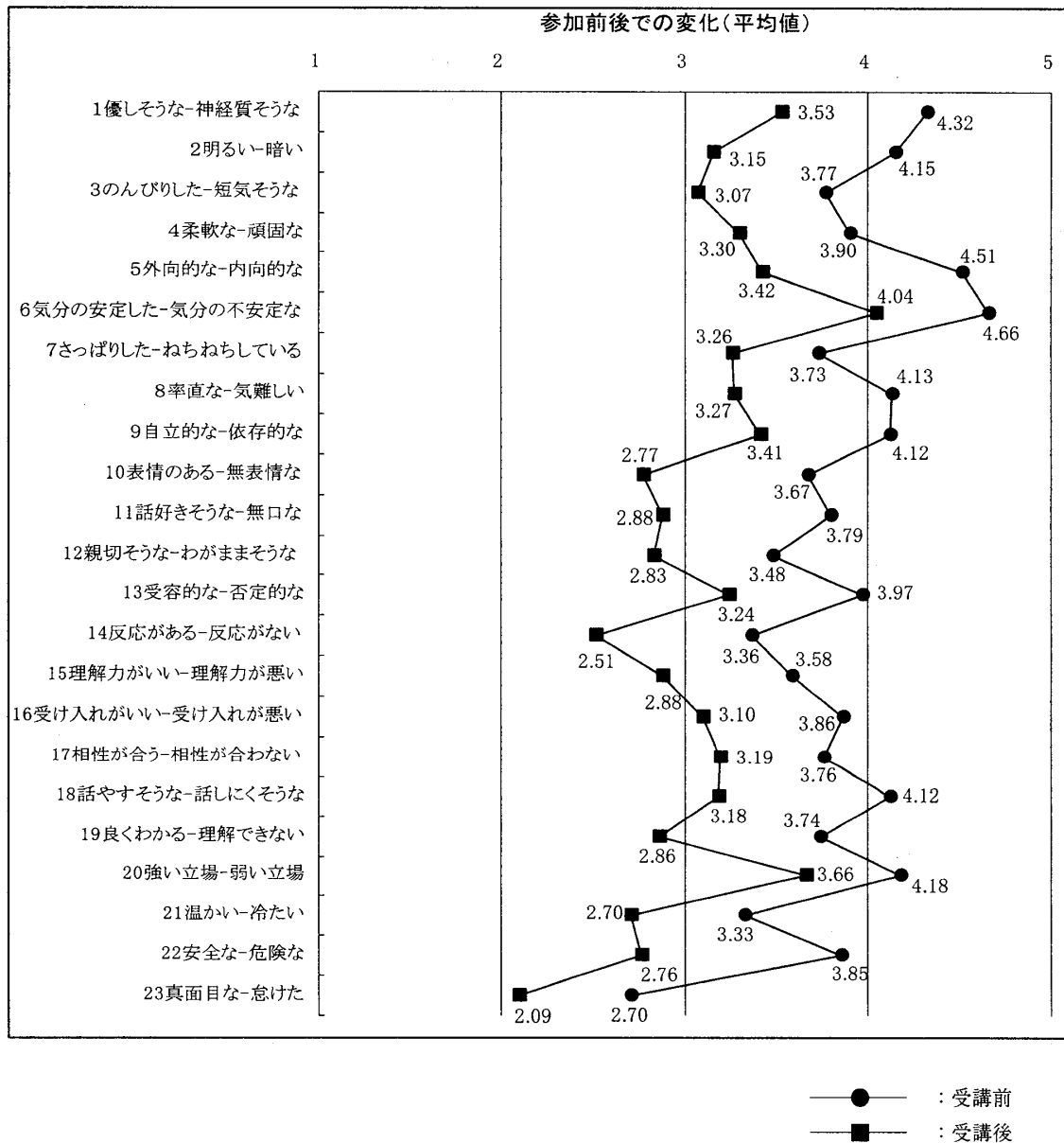


Figure 1 受講前後での各項目の平均値の変化

窺える。さらに、性差の見られた項目が受講前の5項目から受講後1項目へ減少したことは、受講によって学生のイメージに幅が生まれ、精神障害者に対して多角的な視点で捉えることが可能となり、先入観の払拭に繋がったとも推測することができる。

3) 受講前後でのイメージの因子分析

次に、イメージ評定項目の内部構造を明らかにするために、受講前、受講後のデータの因子分析(バリマックス回転)を行った。固有値の大きさ及びス

クリー図から、受講前で3因子(累積寄与率46.32%)、受講後で5因子(累積寄与率57.72%)を抽出した。

その結果、受講前はTable 5に示すように、第1因子は“優しそう-神経質そうな”、“話やすそう-話しくそうな”“受容的な-否定的な”などといった項目で負荷量が大きいため「否定的性質イメージ」因子と解釈できる。また、第2因子は“理解力がいい-理解力が悪い”、“安全な-危険な”、“受け入れがいい-受け入れが悪い”などの項目で

Table 2 平均値の差の検定結果

	t 値	自由度	有意確率
1 優しそう-神経質そう	8.48	77	**
2 明るい-暗い	9.26	77	**
3 のんびりした-短気そう	6.06	74	**
4 柔軟な-頑固な	5.97	76	**
5 外向的な-内向的な	10.03	75	**
6 気分の安定した-気分の不安定な	5.21	75	**
7 さっぱりした-ねちねちしている	4.86	76	**
8 率直な-気難しい	7.55	76	**
9 自立的な-依存的な	6.25	75	**
10 表情のある-無表情な	7.48	76	**
11 話好きそう-無口な	7.66	76	**
12 親切そう-わがままそう	7.53	76	**
13 受容的な-否定的な	6.90	77	**
14 反応がある-反応がない	7.62	75	**
15 理解力が高い-理解力が悪い	6.91	75	**
16 受け入れがいい-受け入れが悪い	7.67	77	**
17 相性が合う-相性が合わない	6.36	76	**
18 話やすそう-話しくそう	7.96	76	**
19 良くわかる-理解できない	8.01	75	**
20 強い立場-弱い立場	5.00	76	**
21 温かい-冷たい	6.64	76	**
22 安全な-危険な	9.91	75	**
23 真面目な-怠けた	4.98	75	**

** p < 0.01

Table 3 性別との比較(受講前)

	F 値	有意確率	
1 優しそう-神経質そう	4.23	0.04	*
2 明るい-暗い	0.23	0.63	
3 のんびりした-短気そう	1.12	0.29	
4 柔軟な-頑固な	0.33	0.57	
5 外向的な-内向的な	0.20	0.66	
6 気分の安定した-気分の不安定な	0.00	0.98	
7 さっぱりした-ねちねちしている	1.61	0.21	
8 率直な-気難しい	2.53	0.12	
9 自立的な-依存的な	0.20	0.66	
10 表情のある-無表情な	1.50	0.23	
11 話好きそう-無口な	0.79	0.38	
12 親切そう-わがままそう	0.35	0.56	
13 受容的な-否定的な	5.27	0.02	*
14 反応がある-反応がない	1.15	0.29	
15 理解力が高い-理解力が悪い	0.66	0.42	
16 受け入れがいい-受け入れが悪い	1.56	0.22	
17 相性が合う-相性が合わない	2.88	0.09	
18 話やすそう-話しくそう	9.83	0.00	**
19 良くわかる-理解できない	0.04	0.85	
20 強い立場-弱い立場	12.90	0.00	**
21 温かい-冷たい	4.42	0.04	*
22 安全な-危険な	0.47	0.50	
23 真面目な-怠けた	0.24	0.62	

** p < 0.01

* p < 0.05

Table 4 性別との比較（受講後）

	F 値	有意確率
1 優しくそうな-神経質そうな	0.04	0.84
2 明るい-暗い	0.02	0.89
3 のんびりした-短気そうな	0.00	1.00
4 柔軟な-頑固な	0.63	0.43
5 外向的な-内向的な	1.35	0.25
6 気分の安定した-気分の不安定な	0.00	0.96
7 さっぱりした-ねちねちしている	0.01	0.93
8 率直な-気難しい	1.09	0.30
9 自立的な-依存的な	0.35	0.56
10 表情のある-無表情な	0.01	0.92
11 話好きそうな-無口な	3.06	0.08
12 親切そうな-わがままそうな	1.43	0.24
13 受容的な-否定的な	0.06	0.80
14 反応がある-反応がない	0.08	0.78
15 理解力がいい-理解が悪い	0.94	0.34
16 受け入れがいい-受け入れが悪い	0.00	0.98
17 相性が合う-相性が合わない	4.44	0.04 *
18 話やすそうな-話しにくそうな	0.28	0.60
19 良くわかる-理解できない	1.24	0.27
20 強い立場-弱い立場	0.37	0.55
21 温かい-冷たい	0.90	0.35
22 安全な-危険な	3.31	0.07
23 真面目な-怠けた	0.57	0.45

* p < 0.05

Table 5 受講前でのイメージの因子分析結果

	否定的性質 イメージ	疎 遠 イメージ	内向的 イメージ
1 優しくそうな-神経質そうな	0.78	0.04	0.13
18 話やすそうな-話しにくそうな	0.70	0.28	0.05
3 のんびりした-短気そうな	0.67	0.11	0.03
2 明るい-暗い	0.63	0.19	0.36
13 受容的な-否定的な	0.57	0.23	0.41
6 気分の安定した-気分の不安定な	0.56	0.13	0.28
21 温かい-冷たい	0.55	0.22	0.24
4 柔軟な-頑固な	0.30	0.03	0.29
15 理解力がいい-理解が悪い	0.03	0.63	0.24
12 親切そうな-わがままそうな	0.21	0.61	0.24
22 安全な-危険な	0.55	0.57	0.09
23 真面目な-怠けた	0.12	0.56	0.12
19 良くわかる-理解できない	0.31	0.56	0.15
20 強い立場-弱い立場	0.02	0.52	0.04
17 相性が合う-相性が合わない	0.48	0.50	0.17
14 反応がある-反応がない	0.11	0.49	0.43
16 受け入れがいい-受け入れが悪い	0.26	0.44	0.25
9 自立的な-依存的な	0.23	0.38	0.22
11 話好きそうな-無口な	0.02	0.17	0.81
10 表情のある-無表情な	0.08	0.37	0.73
8 率直な-気難しい	0.53	0.13	0.64
5 外向的な-内向的な	0.35	0.12	0.52
7 さっぱりした-ねちねちしている	0.39	0.01	0.40
平方和	4.33	3.27	3.06
寄与率 (%)	18.82	14.21	13.30
累積寄与率 (%)	18.82	33.02	46.32

Table 6 受講後でのイメージの因子分析結果

	受け入れ イメージ	相性 イメージ	反応性 イメージ	親密 イメージ	外向的 イメージ
16 受け入れがいい-受け入れが悪い	0.70	0.29	0.18	0.19	0.05
3 のんびりした-短気そうな	0.62	0.05	0.13	0.05	0.30
6 気分の安定した-気分の不安定な	0.61	0.58	0.03	0.06	0.05
4 柔軟な-頑固な	0.57	0.16	0.35	0.08	0.31
9 自立的な-依存的な	0.57	0.17	0.25	0.05	0.00
15 理解力がいい-理解力が悪い	0.56	0.03	0.26	0.53	0.08
2 明るい-暗い	0.07	0.68	0.14	0.36	0.06
20 強い立場-弱い立場	0.20	0.68	0.06	0.12	0.01
18 話やすそうな-話しにくそうな	0.39	0.63	0.08	0.42	0.09
13 受容的な-否定的な	0.01	0.60	0.32	0.08	0.10
1 優しそうな-神経質そうな	0.13	0.46	0.05	0.18	0.44
17 相性が合う-相性が合わない	0.39	0.44	0.23	0.41	0.08
10 表情のある-無表情な	0.30	0.19	0.71	0.03	0.08
11 話好きそうな-無口な	0.23	0.35	0.62	0.16	0.03
14 反応がある-反応がない	0.03	0.21	0.60	0.20	0.01
21 温かい-冷たい	0.19	0.30	0.59	0.20	0.13
23 真面目な-怠けた	0.10	0.02	0.03	0.75	0.06
19 良くわかる-理解できない	0.04	0.29	0.25	0.70	0.04
22 安全な-危険な	0.45	0.19	0.11	0.57	0.28
12 親切そうな-わがままそうな	0.06	0.19	0.29	0.42	0.41
8 率直な-気難しい	0.22	0.19	0.44	0.12	0.57
5 外向的な-内向的な	0.35	0.34	0.41	0.21	0.49
7 さっぱりした-ねちねちしている	0.39	0.37	0.03	0.09	0.48
平方和	3.31	3.29	2.60	2.59	1.48
寄与率 (%)	14.40	14.32	11.31	11.25	6.43
累積寄与率 (%)	14.40	28.73	40.04	51.28	57.72

負荷量が大きいため「疎遠イメージ」因子、第3因子は「話好きそうな-無口な」「外向的な-内向的な」などで負荷量が大きいため「内向的イメージ」因子と解釈した。

受講後はTable 6に示すように、第1因子は「受け入れがいい-受け入れが悪い」、「柔軟な-頑固な」などといった項目で負荷量が大きいため「受け入れイメージ」因子と解釈できる。また、第2因子は「明るい-暗い」、「強い立場-弱い立場」、「話やすそうな-話しにくそうな」などの項目で負荷量が大きいため「相性イメージ」因子、第3因子は「表情のある-無表情な」「話好きそうな-無口な」「反応がある-反応がない」などで負荷量が大きいため「反応性イメージ」因子と解釈した。第4因子は「真面目な-怠けた」「良くわかる-理解できない」などで負荷量が大きいため「親密イメージ」因子と解釈した。第5因子は「率直な-

気難しい」「外向的な-内向的な」などで負荷量が大きいため「外向的イメージ」因子と解釈した。

4) 各因子間の関連性

因子分析で抽出された受講前イメージ因子「否定的性質イメージ」「疎遠イメージ」「内向的イメージ」を軸として、受講後の5因子との関連性を明らかにした。その結果は、Figure 2～Figure 4通りである。

「否定的性質イメージ」と「相性イメージ」との間には、 $r = 0.22$ の相関が見られた。また「疎遠イメージ」と「相性イメージ」にも $r = 0.23$ の相関が見られた。さらに、「内向的イメージ」と「反応性イメージ」にも $r = 0.25$ の相関が見られた。このことから、受講により「否定的性質イメージ」「疎遠イメージ」が「相性イメージ」へ変化、「内向的イメージ」が「反応性イメージ」へと変化するこ

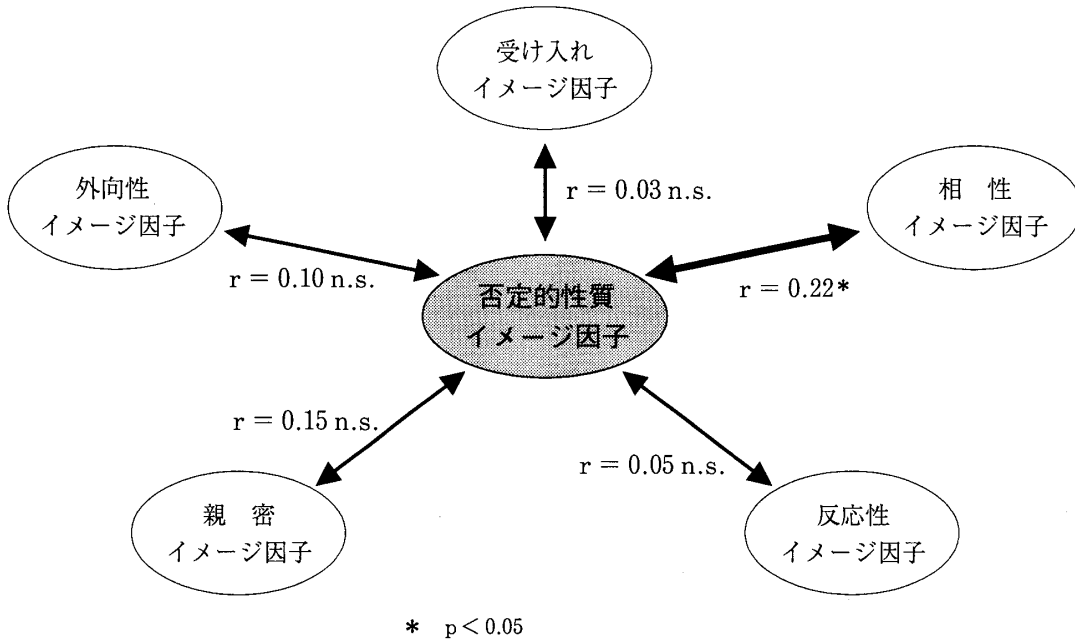


Figure 2 受講前後での各因子の相関（否定的性質イメージ因子軸）

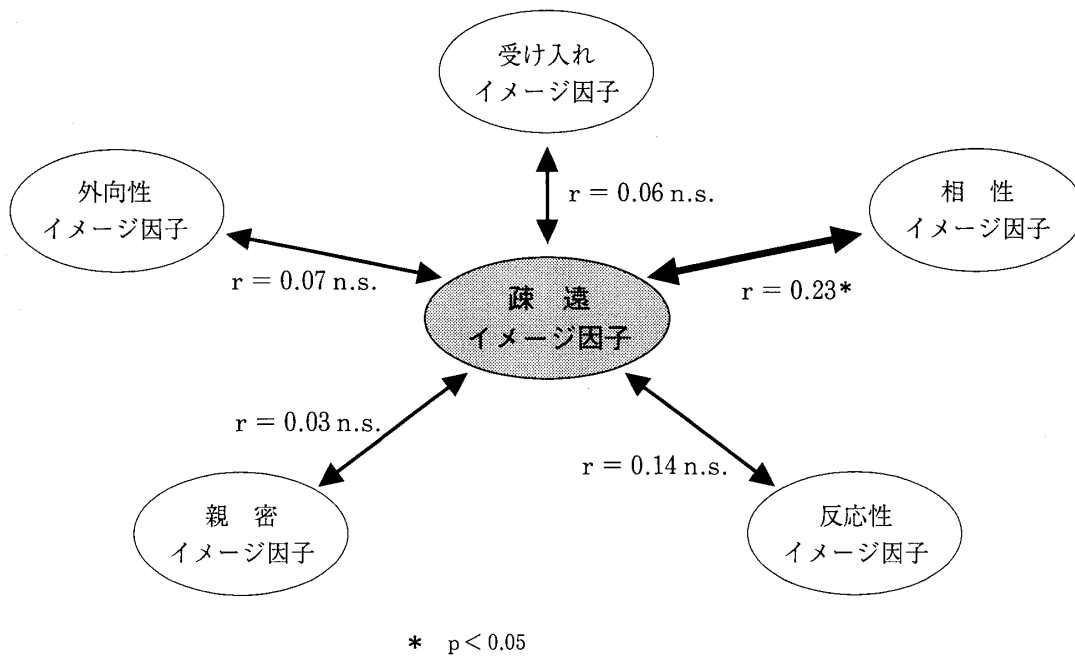


Figure 3 受講前後での各因子の相関（疎遠イメージ因子軸）

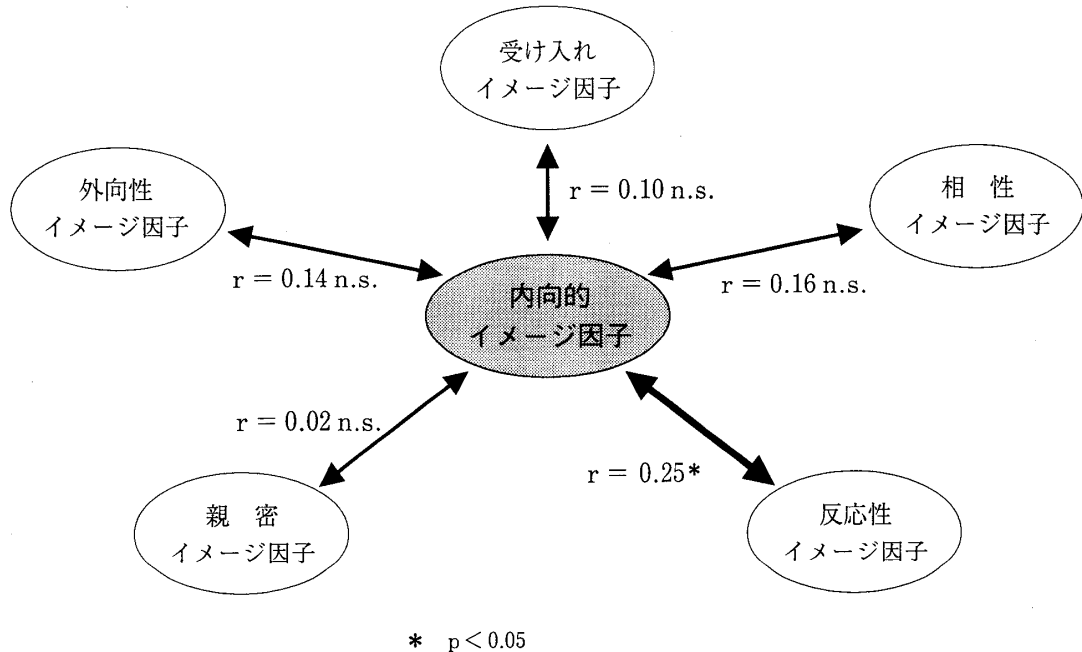


Figure 4 受講前後での各因子の相関（内向的イメージ因子軸）

とが明らかとなった。

考 察

1. 「精神医学」の講義の位置づけ

「精神医学」の講義は大部分の学生にとって精神医学についての最初の本格的な教育を受ける機会であったと位置づけられるであろう。学生時代に精神障害についての講義を受けることは適切なイメージを形成するための生涯教育の一環となり、将来一人として精神科の問題に対処する際の基本的な手がかりとして活用できる可能性がある。

端ら⁽¹⁴⁾は看護学生が精神科の臨床実習に強い緊張や不安を抱き、精神科医療機関への就職を希望しないことがしばしばあると述べている。しかしその一方では、石毛ら⁽¹⁵⁾が指摘するように、多くの看護学生はカウンセリングや心のケアへの関心が高まっており、多くの学生には精神医学についての潜在的な関心があるのも事実である。このように、精神疾患や精神障害者には否定的なイメージを持つが、こ

ころの疾患に対しては肯定的なイメージを持つという相反する傾向は、北村ら⁽¹⁶⁾が主張するような「『こころ』の不調は受け入れやすいが、『精神』の不調は受け入れがたい」という一般的な傾向が反映されているとも考えられる。

2. 精神障害者のイメージの評価方法

もとよりイメージそのものは、目に見える形で客観的に捉えることができない内面的なこころの現象である。そこにイメージを研究することの本質的な難しさがある。

「イメージは、何らかの形で表現されなくては、その用語そのものの存在も危うい。そこで、表現された形から、それをイメージの表現と考えて、そこにイメージの存在を推測していかざるを得ない」⁽¹⁷⁾と言うように、イメージ自体は無形のものである。しかし、イメージには、こころの現象すなわち内面的なこころの表れとみなす観点がある。藤原(2003)が「イメージは、個人における主観的で個別的なこころの現象ないし心理的事実と考えられる。」

さらに、「イメージは、一種の体験様式である。他者からはもとより自らにおいても、本質的には不可知である内面的な心そのものの世界について、そこからの何らかの表れとしてここで体験する様式がイメージということになる。」と述べるように、イメージを一種の体験様式として捉え、内面を意識する体験を通して他者への気づきを生む機会を得ることが可能になると考える。

本調査では、学生の精神障害者イメージの変化は、「精神医学」受講がきっかけの1つになっていることが明らかにされた。受講前では「否定的性質」「疎遠」「内向的」といったやや否定的内容を含むイメージであったのが、受講後には「受け入れ」「相性」「反応性」「親密」「外向性」といった中間的あるいは肯定的なイメージ内容へと変化しており、受講を契機に否定的先入観が払拭されている。さらに、学生は受講後により多方面からのイメージが可能となり、イメージできる内容に幅が生まれている。このように、「精神医学」受講することで、学生に好ましい影響を与えたことが確認された。

このことは、学生がイメージという体験を通じて、精神障害者への手がかりとなることを期待する。

3. 精神障害者のイメージの変化

① 受講とイメージ

好悪の感情という情緒的な認識は、情報が少なく未知のものに対するおそれが大きい場合否定的になる⁽¹⁵⁾といわれている。本研究において学生のイメージが肯定的な方向に変化したことは、講義という形の客観的な情報を与えられたという条件が肯定的イメージの取得に有利に作用したと考えられる。伊藤ら⁽¹⁸⁾は看護教育によって学生の「知識」は増加するが、それは障害者を軽蔑する方向ではなく、「楽観的態度」からさらに一段と理解が深まる過程に至るものであると述べているが、本研究においてもそのような過程として理解することができる。しかし、講義という形で精神障害者についての情報を付与され否定的な感情の減少した学生がただちに許容的な態度を取らないという背景には、疾患の重篤さを把握したためその疾患に関与することの困難さや甲斐の少なさを予測してしまう心理がすると推測できる。また、実習を経験した学生が、「(精神障害者の)看

護は難しい」と強く意識したのは恐怖感を主体とした不安が現実の看護上の問題解決という実際的な問題に直面したためであり、むしろ自然な反応であるという小林ら⁽¹⁹⁾の指摘にもあるように、疾患の重篤さの認識という側面の現われと考えられる。

② 性別とイメージの変化

23項目で性別によって違いが見られた項目は、受講前5項目、受講後1項目となっているが、受講前の5項目の特徴は、精神障害者の置かれている立場や話しやすさなどの精神障害者への接近、接触に関する項目であったといえる。今回の結果からは、男女別のイメージ形成に何かが関係しているかを明らかにすることができなかったため、今後男女のイメージ差の要因についても明らかにしていくことが必要であろう。

今後の課題

今回は、性別を軸にして分析を試みて男女で異なるイメージを持つことが明らかとなったが、その影響要因までは明らかにすることができなかった。今後、「ボランティア経験の有無」、「実習経験の有無」などの分析軸を設定し、関連要因を絞り込んでいくことが必要である。

また、「精神医学」での学生のイメージ変化を明らかにすることができたが、他にも「精神科リハビリテーション学」や「精神保健福祉論」などその他の科目についても同様の調査を行い比較検討していくことで、社会福祉教育における教育効果の測定へ応用していくことが可能になると考える。

引用・参考文献

- (1) 高橋シュン『看護行為を支えるもの』25～27 日本看護協会出版会 1987
- (2) Osgood, C. E. and et al.: The Measurement of Meaning Univ. of Illinois Press. Urbana, 1957
- (3) 岩下豊彦『SD法によるイメージの測定 その理解と実施の手引き』川島書店 1983
- (4) 井上正明・小林利宣『評価技法としてのSD

- 法の意義とその用い方(その2)～形容詞対の尺度構成の方法～』指導と評価 31(10) 1985
- (5) 藤原勝紀『イメージを使いこなす』173～179 臨床心理学 第3巻第2号 2003
- (6) 塩村公子『社会福祉専門職の人材養成に関する課題』37～43 社会福祉研究 第90号 2003
- (7) 白澤政和『日本における社会福祉専門職の実践力』13～20 社会福祉研究 第90号 2003
- (8) 富樫ひとみ『社会福祉における価値とその研究領域』75～76 社会福祉研究 第85号
- (9) 武田加代子, 南彩子『ソーシャルワークの専門職性評価指標作成の試み』32～41 社会福祉学 第42巻第2号 2002
- (10) 木村真理子『精神保健領域で働くソーシャルワーカーの大学院教育』26～34 ソーシャルワーク研究 vol. 30 no. 2 2004
- (11) 荒田寛『pswの役割と課題—精神障害者の社会参加と生活支援の視点—』50～57 社会福祉研究 第84号
- (12) 平塚良子『ソーシャルワーク・マインドを育成する実習教育を目指して』84～89 社会福祉研究 第84号
- (13) 岡田喜篤『保健福祉・医療福祉系大学における社会福祉教育のあり方』37～44 社会福祉研究 第86号
- (14) 端章恵, 谷直介『精神障害に対する看護学生の意識～一般女子学生との比較～』72～79 ころの健康 第11号 1986
- (15) 石毛奈緒子, 林直樹『看護学生の「精神障害者」に対するイメージ～精神保健の講義による変化～』11～21 日本社会精神医学雑誌 第9号 2000
- (16) 北村俊則, 坂本真士『精神疾患と偏見』Psychiatry Today 23 1998
- (17) 藤原勝紀『イメージを使いこなす』173～179 臨床心理学 第3巻第2号 2003年
- (18) 伊藤弘人, 森俊夫 他『精神障害に対する態度に影響を及ぼす要因～看護学生を中心とした縦断的調査から～』583～592 臨床精神医学 22 1993
- (19) 小林淳子, 伊藤尚子 他『精神科臨床実習前から実習後までの精神障害者に対する看護学生の意識の変化』63～72 東北大学医療技術短期大学紀要 3 1994
-